これからの英語科教育研究のあり方
～実証的研究、形成的実践研究、自己研修のすすめ～

肥沼　則明

はじめに

今日、私たち英語科教員をめぐる諸問題は数え切れないほどあります。しかし、その中で私たちの最大の関心事は、日々の授業をどう実り多いものにしていくかということでしょう。実際、毎日のように考えているのは、目の前にいる生徒の目を輝かせ生き生きと活動させるにはどうしたらいいか、表現力や積極的にコミュニケーションしようとする態度を育てながら受験にも耐えられる英語力をつけるにはどうしたらいいか、などということではないでしょうか。

私自身がそのような悩みを抱えている中、「SURE英語教育研究会」より例会で話をするようにと依頼がありました。最初は中学校の実践例を紹介しようと思いましたが、本会には高校の先生も大勢いらっしゃるので、何かちがった視点でお役に立てることはないかと考えました。そして、お話ししたのが表題のような内容でした。そこで、今回のレポートでは、その「平成7年度SURE英語教育研究会第4回例会」（平成8年3月2日）でお話しした内容を再編集して紹介します。このレポートがみなさんのお役に立てば、埼玉県の英語教育界で育てていただき者として少しでも恩返しができたものと思います。

1　実証的研究

（1）実証的研究の必要性

最近、中学校・高校の英語教育に関する研究発表は大変多い。かつては一部の学会や県レベルの大会くらいしかなかったと聞くが、今では市町村単位のものや本会のような自主サークルなど数え切れないほどの研究発表会がある。また、内容的にも実に豊富で、あらゆる角度から英語教育を発展させようという気運が感じられる。しかし、その発表内容を細かく見ていくと、そこで紹介されている教育効果や他の教師への応用度（つまり一般化度）について疑問視されるものが少なくないという。確かに、実践報告の内容そのものは大変参考になるが、研究発表や論文という形のものに表すには、この実践報告という「実感」にとどまってしまったのでは物足りないと言えないこともない。それは、例えば調査したことや実践したことがどれほど妥当性と信頼性があるのかと追求されたときに、論理的に実証できるだけのデータを持ち合わせていないものが多いからである。

さて、ここでいう「論理的に実証できるデータ」とは、「統計学的にきちんと分析され、考察されたデータ」と読み替えてもいい。統計学的データ処理というものは、私たちごく普通の中学校・高校の英語教師にとっては縁遠いものであるが、心理学などの分野においてはごく当たり前に行われている。そこでは、妥当性のある実験計画と信頼性のあるデータがあって初めて論文として成り立つというのが前提である。例えば、生徒が英語の授業が好きであるということを結論づけるために、「アンケートをとったところ、80％の生徒が英語の授業が楽しいと言っていた。」という単なるraw dataを示しても何の意味もないという。その点から言うと、英語教育に関するこれまでの発表や論文の中には、研究の意欲は認めても学術的な意味を持たないと判断されてしまうものもあるであろう。

したがって、せっかく研究発表をするなら、研究の過程で得られた結果をきちんと科学的な根拠のあるものとしたい。そのためには、統計学や実験計画法の基礎をしっかりと学ばなければならない。実は、筆者自身も実証的研究の仕方を勉強し始めたばかりであり、ぜひ仲間を増やしたいと考えている。

（2）統計処理の実際

では、教育の世界においてきちんとした統計学の勉強はなぜ必要なのであろうか。次に簡単な例を示す。例えば、平均点が50点である2回のテストがあったとしよう。A子さんは1回目のテストで50点を取り、何とか平均点が取れたと胸をなでおろした。そして、2回目のテストで55点を取り、平均点を越えたと小躍りした。その姿を見て私たち教師もA子さんの努力の成果を喜んでいいのであろうか。結論は、そうとは言い切れない場合があるということである。それは、次のような得点結果があったからである。

	受験者数	満点	各得点	平均点
1回目	5	100	30，40，<u>50</u>，60，70	50
2回目	5	100	15、<u>55</u>、60，60，60	50

※下線部がA子さんの得点

つまり、実際にはA子さんは2回目のテストで相対的な順位を落としており、全体の得点分布の関係でたまたま2回の平均点が同じだったというわけである。しかし、私たち教師も生徒数がこのくらい少なければそのことに気づくが、200名もの生徒を抱えていると見た目にはわからず、A子さんと同様の錯覚をしてしまう。これがいわゆる「数字のマジック」であり、日頃から平均点ばかりに気をとられていると陥ってしまう落とし穴である。

さて、上記のような結果の場合には、「中央値」という概念を引き合いに出せば、すぐに落とし穴から抜け出られるであろう。しかし、それだけでは2回のテストの性格の本質は理解できない。同じ平均点である2つのテストの相違点はどこにあるのだろうか。5人の生徒の得点分布はいったいどういうことを物語っているのであろうか。そのような領域まで踏み込むには「統計学的なデータの検定」が必要になってくるのである。

では、統計学的なデータの検定方法にはどのようなものがあるのであろうか。教育や心理学においてよく用いられる方法には、平均点のちがいの意味を調べる「t検定」や「F検定」、得点分布の意味を調べる「分散分析」、度数分布の意味を調べる「X2（カイ2乗）検定」などがある。例会では、このうち七検定の基礎を紹介したが、個々の説明をするだけの紙面の余裕はここにはないので、興味のある人はぜひ次の本を参照されたい。この本は、筆者や同僚が調べた中ではもっとも初心者向けにやさしく丁寧に統計について解説したものとして推奨できると考えている。

・『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』田中敏・山際勇一郎著（教育出版）

2　形成的実践研究

(1) 授業改善のための研究

「形成的実践研究」とはおそらく耳慣れないことばであろう。実はこれは筆者の造語である。ここ数年、評価の研究が盛んであるが、その中で「形成的評価」ということばがよく登場する。これは、生徒の発達を促すために、指導の中に評価場面を位置づけてそれを生徒にフィードバックする方法である。それになぞらえて、授業をしながら授業を改善していく方法の研究をこのように名付けてみた。つまり、前項がいわば自分の研究成果を世に問うための方法であるとすれば、ここで述べようとしていることは日々の授業の腕をどのようにして磨いていくかという方法を考えるものである。

「はじめに」でも述べたが、私たち英語教師のもっとも大きな関心事は授業をいかに実り多いものにできるかということであろう。しかしその一方で、多くの教師が悩んでいるだけで、なかなかその先に踏み出せないでいるのもまた確かであるように思われる。このような状況を改善する方法はいくつか考えられるが、もし、勤務時間外でも努力する気があるというならば、次の2点をクリアーできるように努力するとよい。

・自分が中心になって同僚を研究に巻き込むこと
・広く学校外にも研究仲間を求めること

まず第１の点は、一人で悩んでいたり、一人で頑張っていても職場の英語教育をめぐる問題は解決されないし、したがって授業の質も向上せず、結果として生徒もなかなか変容しないからである。ところが、現実にはあることについて教科内のコンセンサスを得るのはとても難しい。中にはまったくやる気のない同僚がいる場合もある。だからと言って、そのままにしていては何も解決しない。同僚がイニシアティブをとってくれるのを待っていたのでは、いつまでたっても発展は望めない。ならば自分が先頭に立って研究を進めればいいということになる。職場によって事情が異なるので、一概にその方法を述べることはできないが、とにかく同僚を巻き込むべく一歩一歩努力する必要がある。第2の点は、井の中の蛙にならないということである。学会や研修会に出席すればわかるが、同じような悩みを抱えながら日々努力している仲間はたくさんいる。その人たちのアイデアの中には、明日の指導に生かせそうなものから教育の本質についての自分の考えを揺るがすようなものまで様々なものがある。また、自分の実践を発表することも大きな勉強の機会となるだろう。詳しいことは次項に譲るが、口頭発表や論文発表をとおして同じようなことに興味をもつ仲間と意見を交換するだけで、授業はがらりと変わるものである。

(2) 授業改善の方法

①　教科内統一研究

先述したとおり、教科指導の腕を磨くには仲間と協力するのがもっともよい。もちろん、一人でできる部分もあるが、それだけでは「それはあなただからできること」とみなされてしまいかねない。ここでいう仲間とは、第一に同じ職場の英語科教員を指す。そこを固めずして研究は進まないので、そこから出発しなければならない。ただ、このような場合に必ず起こるのが、全員の賛同を得られないのではないかという心配である。特に大

規模な高校などでは専任の教諭だけで10人以上はいるだろうから、なかなか教科会での意見もまとまらないだろう。しかし、このような場合に便利なのが「数の論理」で押し切る方法である。一人、二人から始めて、賛同者が過半数になったら後はこっちのものである。残りの教員もしぶしぶでも協力してくれるようになる。そのためにも、定期的な教科会を逃さず、徹底的に話し合う機運を自身で維持しなければならない。

さて、そうなったら進めたいのが、三年間を見通した教科としての教育方針の決定である。最終的にどのような姿の生徒に育てたいのかというおぼろげな達成目標から始め、そこへ至るための具体的な方策を探ることになる。特に重要なのが、「これだけは全員でやろう」というものを指導過程なり指導計画の中にはっきりと位置づけて実行することである。その際には、個々の教員の自由裁量を認めながらも具体的な共通指導場面は設けることを約束する。最初は生徒も戸惑うかもしれないが、動き出してしまえば英語科教員集団の気迫に生徒も折れる、というより信頼を置いてついてくるようになるのである。

このような体制作りは、実は二次的な効果も生み出す、それは仲間でアイデアを交換し合おうという雰囲気ができることである。附属学校などを除くと、英語科の教科準備室に教員が集まっているような学校は少ないであろうから、日頃からなかなかそういう機会はないと思われる。したがって、どうしても個人主義に陥ってしまう傾向がある。だが、一度授業のアイデアやプランを共有し合うことを経験すると、そこから生み出される力の大きさに驚くと思う。ぜひ、すべての学校で実践してもらいたいものである。

②授業相互評価研究

これは、一言で言うと「授業を見せ合う」ということである。筆者自身は、附属中学校に勤務しているので、自大学はもとより他大学の教育実習生に授業を観察されたり、年に一度の研究協議会で衆目にさらされたり、長期研修生や外国からの不意の訪問客等に授業を視察されたりすることにそれほど抵抗はないが、一般的にはこれが一番難しいようである。特に同じ教科の教員に自分の授業を見せるとなると、自分の指導のいたらなさを見抜かれるようで何となく気分が重くなる。しかし、他の教員の授業を見ることが一番の勉強になることは、ここのところ盛んに行われている授業研究会（ビデオによるものも含む）の様子を見てもわかる。「ああ、あんな工夫をすればいいのか。」というような素朴な発見が、自分の授業を生き返らせるきっかけになるのである。だが、もっとも勉強できるのは、実は授業を公開した側なのである。授業を公開するとなれば、自然と日頃からの指導にも熱が入る（本当はそれではいけないが）。そして、参観者から授業の批評を直接聞けるわけである。だから、「まな板の上の鯉」になったつもりで思い切って自分の授業を公開することを勧めたい。

さて、授業公開の方法はいろいろとあるが、第一に勧めたいのは同じ学校の教員同士で授業を見せ合う方法である。そして、その際には必ず授業をビデオに収めることである。これは、授業を見られなかった教師に見てもらったり、自分自身でさらに細かく分析したりするためである。その後、授業批評会で同僚からいろいろな意見をもらえれば、結果的に一番勉強になるのは何を隠そう自分自身ということになる。そのためにも、まずは自分から最初の候補となることを申し出たい。そして、一度やって同僚に意見を言わせてしまえば、次はその同僚がやらざるをえなくなるという段取りである。

ところで、これまで幾度となく授業をビデオにとってきた者としては、ビデオ撮影のテ

クニックとして次の2点を勧めたい。

○撮影場所・…ビデオによる授業研究会の多くはカメラを教室の真ん中の後ろに置いているが、あれはいただけない。もしカメラが1台しかないのなら、最良の場所は「窓際の前から3分の1くらいの所」である。なぜなら、第一に教師のアップがとりやすいことと教師の声を入れやすいこと。そして第二に、カメラをパンすることで生徒の表情を撮れることである。実は授業の善し悪しを見極めるのには第二の点が重要で、教師の授業の進め方と生徒の授業の受け止め方を同時に収めることができるからである。

○撮影機材・…ハイ8やデジタル・カメラの普及で映像は見やすくなったが、音声は未だに聞きづらいものが多い。もちろん、ピン・マイクを使う手もあるが、これは生徒の声を拾ってくれない。そこで勧めたいのが、パラボラ式の集音マイクである。カメラを向けた方角の音を集中的に効率よく拾う効果があり、生徒の方へカメラを向ければ、生徒の発話もものの見事に拾ってくれる。雑音も減るので、ビデオによる授業研究会では格段の聞き易さが得られる。15，000円程度で購入できるので、ぜひ備えてみてはどうだろう。

③自己授業分析

授業の腕を磨くには、他の教師に授業を批評してもらうのが一番勉強になる方法であるが、自分で自分の授業を分析するだけでも大いに勉強になる。授業中の発言（Teacher Talk）、立つ位置、視線の配り方など、客観的な立場に立って見ると改めて気づくことがたくさんあるはずである。「あの動きは不自然だった。」「あんなところで気づかないうちにまちがえたことを言っていた。」などということに気づくだけでも収穫があったといえる。そして、他の教師に指摘されるまでもなく直すべき点が見えてくる。それはなかなか直せないことかもしれないが、少なくともその後の指導でそれを意識しながら授業をやっていくようになることは確かである。

この中で、ぜひ行ってほしいのがTeacher Talkの自己分析である。自分は授業中にいったいどれだけの英語を生徒に聞かせているか、個々の活動を行わせる際に的確に指示を出しているか、生徒のトラブルに対して適切な支援を与えているかなどは、自分の発言や生徒とのやりとりを細かくチェックすることによって思いのほか見えてくるものである。具体的な方法としては、ビデオからカセットテープなどに音声を落として、何度も聞き返してシナリオを作ってみるとよい。筆者自身も、これまでに2回、50分の授業をすべてシナリオ化したことがあるが、恥ずかしいことに1つの授業で"OK"ということばを200回も言っていたということに気づいた。ちなみに、これは中1の授業ですべて英語で進めたものであったが、いくら平易な英語を使おうと努力したと言っても多すぎると言わざるをえない。その後、OKに代わる表現を使うように努めているのは言うまでもない。

④観点別試験問題の作成と生徒へのフィードバック

評価というものを考えるとき、まず第一に浮かぶのはその算定基準となる定期試験である。いわゆる「観点別評価」がどれほど重要であるかを説いたとしても、最終的に評定をつける際に最も重視するのは定期試験の結果であろう。しかし、それほど大切な試験であ

りながら、いざ作成の段階になると授業ほど気を使って作成されていないというのが実状ではなかろうか。その試験でいったい生徒のどんな力を測ろうとしているのかなどを明確にして試験作りをしている教師がどれほどいるであろうか。そこで提案したいのが、いわゆる総合問題を一掃してすべての問題をねらい別に分けた観点別問題の作成である。ここでいう観点別問題とは、いわゆる「観点別評価」とは関係がない。各小問を測りたい能力別に整理するということである。

この形式の試験の利点は、教師がそれまでの指導の是非を判断しやすくなることと、結果をうまくフィードバックすることによって生徒自身に学習強化の視点を与えてやれることである。現任校では、3年前から観点別問題を作成している。そして、小問毎に得点および平均点を出し、レーダー・チャートを使って生徒にもそれを知らせている。さらに、そのデータをもとに結果を自己分析させ、その後の学習の重点を意識させている（テスト・ノートの作成）。生徒にとっては、それまでの学習の欠如した部分がはっきりとわかると好評である。あえて欠点を探すと、教師も生徒もかなりの労力をかけなければならないということであろう。それでも、観点別試験問題の結果は、自分の指導のあり方を見直す絶好の機会となることだけはまちがいなく、ぜひ多くの教師に実践してもらいたい。

3　自己研修

（1）論文執筆の勧め

「文章を書くのは面倒くさい。」「紀要などの論文を課せられるのは負担である。」確かにそのとおりである。筆者自身、自分の考えの甘さや知識の無さということに加えて、表現力の乏しさも露呈することを覚悟しなければならないので、あまり好んで発表したくはない。しかし、論文や実践記録はできるだけ書くようにしている。それは次のような理由からである。

①文章という形にすることによって、自分の考えを論理的に整理できる

最初は単なるアイデアだけであっても、ある程度の形にするには一から論理的に整理しなければならない。いいかげんなことは言えないから、文献研究などの勉強もする。また、必要なら授業実践もすることになる。それは、結果として指導技術の向上にもつながるわけである。

②記録として残したものは後で活用することができる

これについては、2つの活用法がある。1つは、再び同じような指導場面に遭遇したときに、過去のものを参考にしながら指導過程を考えることができるということ。もう1つは、いざその実践を外部に問いたいときに、発表の下地になるということである。

さて、せっかく論文を書くなら、どこかに投稿したい。もっとも身近な方法は、勤務校の研究紀要である。大抵の場合、応募者が少なくて編集に困っているので歓迎されるはずである。筆者は、これまでに5回、論文及び実践報告を寄せた。次は外部の紀要である。学会関係なら普通研究紀要を発行しているので、思い切って応募してみるとよい。ただし、多くは会員であることを投稿の条件としており、審査もあるので注意したい。また、出版社等が主催している懸賞論文に出してみるものも面白いであろう。高額の研究費がもらえるので入選は難しいが、各誌に目を通してみてどのような傾向のどのようなレベルの作品が入選するのか調べてみることをお勧めする。筆者はこれまでに2度応募したが、そ

のうちの1つが採用され、数十万円の研究費をもらった（平成7年度「英検」研究助成）。

（2）研修会・学会参加の勧め

私たちの仕事は、法律に規定されるまでもなく「常に研修を積まなければならない」ものである。ところが、よく耳にするのは「勉強会に参加したいけど、忙しくて時間がない。」という話である。確かに筆者もかつてはそうであった。しかし、後にそれは甘えであることに気づいた。研修会や学会は土・日に開かれることが多い。平日なら夜7時頃からやる。そこに参加している人たちはけっしてヒマな人たちではない。むしろ、公務でも多忙な人であることが多い。それでも時間とお金を使って参加している。どうしてそういうことができるのであろうか。参加すればわかるが、それは教育にかける情熱以外の何ものでもない。もちろん、SURE英語教育研究会の参加者には言う必要もないことであるが、勉強会への参加を躊躇しているこのレポートの読者には訴えたい。

さて、研修会や学会への参加の形には、受講者として参加する場合と発表者として参加する場合とがある。最初は受講者として参加し、その分野の「達人」たちからできるかぎりのことを学び取りたい。特に、公開授業やビデオによる授業研究会は、授業の腕を磨くためのアイデアを吸収するものとして積極的に参加してみたい。また、自らも授業公開者や発表者となれば、さらに深い勉強ができる。そうして自分を勉強しなければならない状況に追い込むことも、時には必要なことである。さらに、運営側にたって参加することも勉強になる。いつも勉強のチャンスを与えてもらっているばかりではなく、仲間への奉仕ということも考えたい。

このようにして、筆者は年間に20回ほど各種の研修会・学会に参加している（発表、運営を含む）。その中からいくつかを紹介したい。

①英語授業研究学会（関東支部連絡先：神奈川大学外国語学部　高橋先生 tel.045－481－5661）
もともとは大阪を中心にした学会であるが、大阪教育大附属中の高橋先生が神大に来られてから、関東支部が俄然勢いづいた。主な活動内容は、研究発表とビデオによる授業研究が中心の月例会（第4土曜日が多い）と年2会の支部大会と年1会の全国大会である。この学会の売りは、正面切っての授業批評で、関西風の歯に衣着せぬ辛口批評がよい。授業研究としては、もっとも面白い存在といえる。年会費は4，000円（後は無料）。

②ELEC同友会（授業研究部会連絡先：浦和商業高校吉住先生 tel.048－861－2564）母体である「ELEC」は言わずと知れたOral Approachの研究団体である。そして、より身近な研究を目指して独立したのが同友会。主な活動内容は、月例のビデオによる授業研究会と年1回の全国大会である。この会の売りは、和やかな雰囲気の中にも鋭い指摘が飛び出すことで、英語で授業を進めようとしている教師には大いに勉強になると思う。蛇足ではあるが、平成8年度の全国大会では筆者の授業をビデオ研究会に使っていただいた。年会費5，000円。

③関東甲信越英語教育学会（関東支部連絡先：筑波大学附属駒場中・高　谷口先生tel.03－3411－8144）
中・高・大の英語教育がうまく融合した学会である。主な活動は、研究発表や授業研究を行う月例会や季節の研修会、年1回の大会（昭和63年度と平成8年度は埼玉大会、2回とも東松山市）を行う他、ニュースレターや紀要の発行もある。年会費5，000円。

④LLA（関東支部事務局：東洋学園大学視聴覚教育センター三上先生 tel.0471－58－6424）
正式には「語学ラボラトリー学会」という。もともとはLL教育を推進するための学会であるが、最近はCALLやコンピューターを使った英語教育に比重がシフトしている。主な活動は、年2回の支部研究大会と年1回の全国大会を行う他、中学校部会や高校部会が月例で授業研究会を開いて視聴覚機器を使った教育の普及を図っている。もちろん、ニュースレターや紀要の発行もある。年会費6，000円。

⑤英語教育達人セミナー（事務局：筑波大学附属駒場中・高 谷口先生 tel.03－3411－8144）
平成7年度に始まったボランティア・セミナーである。事務局の谷口先生と"達人"長先生が中心となって開催している。年に3回、日曜日に行っていたが、毎回100名を越える参加者があるほど人気があるので、8年度からは全国各地で開かれている。内容は、研究発表やビデオによる授業研究が中心であるが、授業の達人ならではの授業クリニックのような講座もあり、好評である。参加費無料（地方版は有料が多い）。

終わりに

以上、例会でお話ししたことに新たな情報を加えて述べさせていただきました。例会でも、話の後でたくさんのご意見やご感想をいただきました。改めてこのレポートを読まれてのご意見をいただければ幸いです。また、今回の内容以外でも、広く英語教育全般について意見を交換できればと考えております。

なお、ご意見ご感想は、勤務先（〒112文京区大塚1－9－1　TEL：03－3945－3429(ダイヤルイン) FAX：3886）、または自宅（メール・アドレス：koinumas@b. infoweb.or.jp）へお願いいたします。

（筑波大学付属中学校）